病みつきなのはシリーズ

勠b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
病みつきなのはシリーズ

【Ｎコード】
Ｎ６３８５Ｘ

【作者名】
勠ｂ

【あらすじ】
私が書いた『病みつきなのは』と『病みつきティアナ』の纏めです。
連載オリジナルの話も書きます。
彼女――――高町なのはは彼を見る。

自分のものにならない彼を――――

彼女――――ティアナ・ランスターは彼を見る。

かつては自分のものになり、今は違う彼を――――

『追憶の記憶を示す物語』

注意事項（前書き）

要望が合ったからやった

後悔してたらキリがないため後悔しないことにした。

注意事項

こんにちはー勠bでーす

この連載は私が書いてる『病みつきなのは』と『病みつきティアナ』の纏めです。

時系列どうりに載せます。

時系列は

病みつきティアナ＝病みつきティアナ～裏話～→病みつきなのは＝→病みつきなのは～裏話～→病みつきなのは～後日談～→病みつきティアナ～後日談～

と、なります。

各裏話の次はその後の話を少し書くつもりでいます。

後日談の次も書くつもりです。

ティアナ後日談投稿後は最後の話として『病みつきなのは～終章～』を投稿します。

短い期間になるとは思いますが、付き合ってくれたら嬉しいです！！

ＰＳ感想くれたら嬉しいです！！

病みつきティアナ（前書き）

この物語をあなたは知ってるだろうか。

あの日、俺は風邪で倒れてたんだ。

そんな俺を彼女は看病してくれた。

それだけ――――

それだけで終われば良かったのに。

これがきっかけで、彼女達は変わった。

変わってしまった。

誰が悪いといえば、俺になるのかもしれない。

何も出来なかった俺が悪いのかもしれない。

……これ以上言うのは止めるとしよう。

まぁ、なんだ……

この物語は『終わりが決まっていた2人の物語』だ。

そろそろはじまるみたいだ。

――――物語のプロローグが

病みつきティアナ

俺は今自分のベッドの上で横になっている。

「本当に大丈夫なの？」

そんな俺を心配するように彼女———ティアナが言った。

「……頭が痛い」

「痛いと思える内は大丈夫よ」

……病人に対して冷たすぎだろ

俺が風邪を引いてしまったためティアナが看病してくれているのだ。

椅子に座っていたティアナが立ち上がる。

「どれどれ……？」

ティアナが俺に顔を近付けるとお互いの額を当てる。

……ティアナ、顔が近い

「……うん、朝よりも低いわね

「大丈夫？顔がさっきよりも赤いけど」

ティアナはからかうように言う。

「……い、いきなり何すんだよ」

俺が言うとティアナは楽しそうな笑みを浮かべる。

「あら、嫌だった？」

首を傾げ、楽しそうに言うティアナを見つめる。

「……どうでもいい」

拗ねたように俺が言うとティアナが立ち上がる。

「朝から何も食べてないんでしょ

「お粥でも作ってきてあげる」

それだけ言って俺の部屋からティアナが出ていく。

――――俺はティアナが好きだ

目標のために頑張っている彼女を見てたら好きになっていた。

――――彼女とは付き合っていない

でも、こうして看病に来てくれるんだから嫌われてはいない。

――――嫌われてはいない

今はまだ、これで満足だ。

――――――

あれから少ししてティアナが部屋に戻ってきた。

「遅かったな」

ティアナは俯いたままソファーに座り、テーブルの上に蓋をしてある小さめの鍋を置いた。

「……ティアナ？」

何も言わないティアナを心配して彼女の名前を呼んでみる。

すると、ティアナはゆっくりと此方を向いて言った。

「さっきね、なのはさんに会ったの」

――――光が無いで濁った瞳で

――――俺の眼を見ながら

「そしたらね、あんたの様子を聞いてきたの

「なのはさんには関係ないことなのにね

「あたしが元気ですよって言ったらなんて言ったと思う？
「自分も看病に行くって言ったの
「……関係ないのに
「あたし1人で充分ですって言ってもなお付いてこようとするの
「でもね、あたしが少し強く言ったらすぐに諦めちゃった
「迷惑だよね
「簡単な気持ちで人の邪魔をしようだなんて――」

ティアナは口を閉じると黙って俺を見る。

「なのはさんだって俺を心配してくれたんだろ？
「そう邪推に扱わなくても――」
俺が言い終わる前にティアナが口を挟む。

「あんたを心配するのはあたしだけでいい
「あんただって、なのはさんのことを心配する必要ないわよ
「あたしのことだけ心配してくれれば――」

ティアナがそういうと鍋の蓋を開ける。

「ほら、あたしが1人で作ったのよ
「あんたのことが心配だったから急いでね
「邪魔さえ入らなければ急がなくてもよかったんだけど――」

ティアナはなのはさんのことを思い出したのか、一瞬地面を睨むとすぐに目線を俺に戻す。

「ほら、口を開けなさい」
ティアナはスプーンでお粥をすくうと、俺に言う。

……えっ？

「口を閉じてたら食べられないわよ」

ティアナの唐突な行動に戸惑い、動けない俺に言う。

「……それとも、私のじゃなくて、なのはさんのが食べたかった？

「あたしが作ったのは食べたくなくて、なのはさんのが食べたいの？」

「いや！　そんなんじゃなくて！！」

俺を睨むティアナに慌てて言う。

「自分で食べられるから、そういうのはいらないんだけど……」

「病人は大人しく言うこと聞きなさい」

俺はスプーンを見る。

……ていうか

「なぁ、ティアナ

「何でこのお粥は赤いんだ？」

――――そう

ティアナが作ってきてくれたお粥が赤いのだ。

以上なまで……とは言わない、ほんのり赤い程度だ。

「味付けを辛くしたのよ」

……辛くする意味がわからない

……でも、好きな人が作った料理を食べれるどころか、食べさせてくれるなんてチャンスはもう来ないかもしれないし――――

俺は口を開ける。

ティアナはそれを見て、嬉しそうな笑みを浮かべながら俺にお粥を食べさせてくれた。

「フフフ……」

嬉しそうに笑いながらティアナは俺を見る。

「美味しい？」

ティアナは笑みを浮かべたまま俺に聞く。

「美味しいよ」

少し辛い気がするが、それ位が丁度いい。

俺が言うと彼女の笑みが深くなる。

「あんたの大好きなものを少しだけ入れたんだもの、気に入って当然よね」

大好きなもの？

……何を入れたんだろうか

ティアナに聞こうとしてみるが、そんな俺の前にスプーンが現れた。

「あーん」

楽しそうに笑いながら言うティアナ。

……俺をからかって楽しんでるな

俺は大人しくティアナの言うとおりにする。

――――まぁ、いっか

――――――

ティアナが作ってくれたお粥も大分少なくなってきた。

ティアナがスプーンを俺の前に運ぶ。

それを確認して俺は口を開ける。

――――だが

ティアナはスプーンの動き止める。

すると、なにを思ったのかスプーンを自分の口に運んだ。

俺が口を開けたまま止まっていると、ティアナの両手が俺の両頬を優しく包み込む。

――――そして

――――ティアナの顔が俺に近づいてきて

――――ティアナが俺とキスをした

……っ！？

俺の口の中になま暖かいものが押し込まれてい。

何がおきたのか考えているほど余裕が無い俺とは別にティアナはゆっくりと俺から離れる。

「美味しかった？」

顔を真っ赤にしながらティアナは言う。

「な、なんで！？」

「……もしかして、嫌だった？」

ティアナは俺の眼を見ながら言う。

「嫌じゃなかったけど――」
「そうよね、嫌なはずが無い
「私がやったんだから、嫌なはずが無い」
ティアナはそれだけ言うと持ってたスプーンを空っぽの鍋に置く。
「……いきなり口移しだなんて」
俺が言うとティアナは変わらず虚ろな瞳で俺を見つめる。
「急にしたくなったの
「こんなことするのは相手があんただからよ
「あんたは特別だから――」
ティアナは続ける。
「あんただけが私の特別なの
「誰でもない、あんただけが――
「あたしの――」
ティアナはそれから先を言わない。
俺を見つめながら黙る。
――――特別
――――俺だって、ティアナは特別だ

――――だったら

「ティアナ」

俺が彼女の名前を呼ぶ。

ティアナは変わらず俺を見つめる。

「俺も、ティアナのこと特別だって思ってるよ

「今までも――

「そして、これからも、思い続ける！！

「だから――」

俺はティアナを見つめ返す。

「――好きだ」

――――特別だって言ってくれてるんだ

――――だったら、俺だって

――――特別だって伝えたい

――――断られてもいい、伝えたいだけ

俺とティアナが見つめ合う。

すると、ティアナが笑みを浮かべる。

「知ってたわよ」

ティアナはそう言うと俺の頭を撫でる。

「あたしはあんたのことで知らないことなんて無い

「だって、私はあんたのこと好きだもん

「違う、愛してる

「あんたのことを――愛してる」

ティアナがそう言うと立ち上がる。

立ち上がると、何故か俺をまたがる。

ティアナはその状態で俺に左手の人差し指を見せる。

「ほら、見て

「お粥の材料を切ってるときに怪我しちゃったの」

ティアナの指には絆創膏がはってあった。

すると、その絆創膏を外して、傷口を俺に見せる。

「少し深く切っちゃってね」

確かに傷口は少し深い。

俺が口を開こうとするとティアナは言う。

「あたしと約束して欲しいことがあるの」

ティアナは俺を見つめながら言う。

「六課解散までにお互いに本気で好きな人が出来たら別れる」

……本気で好きな人？

「女のあたしからみても、六課には魅力的な女性が多いの

「あんたには、その中で私が一番だって言ってほしい

「あんたには、六課で私のことだけを必要としてほし

「――だから

「あんたが六課で本気で好きな人が出来たら、あたしは大人しく別れる

「あたしはあんた以外の人のことを好きになるはずが無から安心して」

ティアナは俺を左手の人差し指で差すと目の前に指を持ってくる。

「もしこの約束が守れるなら、私の指を舐めて

「あんたに舐めてもらえたら、怪我の治りも早いと思うし」

俺はティアナの指を見る。

血が数滴零れては俺の顔に当たる。

――――ティアナと付き合うことが出来る

――――俺だって、本気で好きになる人はティアナぐらいしかいない

――――だから

俺はティアナの指を舐める。

それを見てティアナは嬉しそうに笑う。

「フフフ……

「舐めてくれるよね

「だって、あんたはあたしのこと大好きだもん

「あたしも大好きだよ

「誰よりも、何よりも

「何時だって、これからも

「――あんたのことを愛してる」

ティアナは指を退かすと顔を近付ける。

俺とティアナはキスをする。

――――2回目のキスを

――――

「風邪が移ったかもね」

ティアナは帰る準備をしながら言う。

「移したらごめん」

申し訳なさそうに俺が言うとティアナは笑みを浮かべながら言う。

「それで、あんたが元気になるなら別に良いわよ

「それに、あたしが風邪を引いたら、あんたが看病してくれるし

「むしろ嬉しいわよ」

それだけ言うとティアナは部屋から出ていく。

扉が閉まる前に彼女は此方を向いて言う。

「おやすみ」

「おやすみ」

ティアナに返事をすると扉が閉まった。

――――幸せな1日だった

そんなことを思いながら、俺は目を閉じた。

――――――

この物語りの続きは知ってるだろうか？

知らない方のために、軽く話としよう。

六課解散時、俺の隣にいるのはティアナではなかった。

ティアナとは別れたのだ。

――――本気で好きな人が出来たら別れる

――――その約束に触れたのだ

――――彼女のことは好きじゃない

でも、俺が傍にいないと何をするかわからない。

――――だから、俺は彼女の隣にいる

彼女――――なのはさんが俺の隣に笑顔でいる。

――――ごめん、ティアナ

病みつきティアナ（後書き）

……さて、今回はこれで終わりだ。

どうだった、幸せなカップルができた瞬間をみた感想は。

まぁ、当事者である俺からすれば涙なしでは見れない物語だな。

何故泣くかって？

それを聞くのは些か不粋じゃないかな。

まぁさ、気になるなら次回も見てくれよ。

次回の物語を案内するのは俺じゃなく、彼女になるけど……

きっと上手くやってくれるだろう。

俺は彼女を信頼してるからね。

さて、この物語を見て続きが気になるから短編を見るっつうのは止めたほうがいい。

ここで次の短編を見てしまったら、この作品の楽しみが減ってしまう。

……さてと、俺にしては長々と喋ってしまった。

次回は彼女だが、その次は俺に戻るらしいね。

また、あなたと会えることを期待して、俺は大人しくこの場から去るとしよう。

ＰＳ　伝え忘れてたことがあった。

俺は『隊長補佐』ではないよ。

隊長補佐が気になる方は……

そうだな、宣伝になるが『病みつき六課』を見るといい。

隊長補佐は俺ではない。

なら、俺は何なんだろうね。

自分でも理解できないよ。

病みつきティアナ～裏話～（前書き）

私は彼と居たかっただけ

ずっと傍に――――

何時からだろう。

それだけじゃ満足出来なくなったのは。

彼に会うたびに好きになる。

彼と離れるたびに恋しくなる。

彼を見つめるたびに愛したくなる。

――――この気持ちは止まらない

――――永遠に

そんな私の物語。

誰にも語る必要がない物語。

ハッピーエンドに似せただけのバッドエンドの物語――――

病みつきティアナ～裏話～

彼は今自分のベッドの上で横になっている。

「本当に大丈夫なの？」

そんな彼を心配するように私が言った。

「……頭が痛い」

「痛いと思える内は大丈夫よ」

……まったく、心配掛けさせて

風邪を引いてしまったため私が看病しているのだ。

椅子に座っていた私は立ち上がる。

「どれどれ……？」

私が彼に顔を近付けるとお互いの額を当てる。

……彼の顔が真ん前にある

私の彼

――――私だけの

「……うん、朝よりも低いわね

「大丈夫？顔がさっきよりも赤いけど」
私はからかうように言う。
「……い、いきなり何すんだよ」
照れながら返事をする彼。
可愛いな
「あら、嫌だった？」
私が言うと彼は顔を背ける。
「……どうでもいい」
拗ねたように彼が言う。
私はそんな彼を見つめながら立ち上がる。
「朝から何も食べてないんでしょ
「お粥でも作ってきてあげる」
私は彼の部屋から出る。
――――私は彼が好き
――――彼もきっと私のことが好き

――――相思相愛なんだ

――――大好きだよ、何時も

――――愛してる

誰にも渡さないし渡す気も無い。

――――だから

――――――

「早く作らないと」

食堂に来て私は早速調理を始めた。

――――そういえば、六課に来てからあまり料理してないな

そんなことを考えながら、私は材料を切りはじめる。

「……っ！！」

材料を切っていたら軽く自分の指を切ってしまった。

……落ち着かないと

私はポケットから絆創膏を取出し切った指にはろうとする。

――――待って

私は自分の傷を見る。

――――舐めてくれるかな

私は自分の傷を軽く舐める。

――――彼だったら、きっと

私は他の材料を取り出す。

少し辛めのお粥にすれば、多少赤いのは誤魔化せれる。

……直接舐めて欲しいけど、いきなりは流石に

「美味しいって言ってくれるかな……」

私はお粥に自分の血を何滴か入れる。

――――私の血を

――――美味しいって言ってくれるかな？

――――――

食堂から出てすぐに、私は声を掛けられた。

「ティアナ」

声をしたほうを向くとそこにはなのはさんがいた。

なのはさんは心配そうな顔をしていた。

「どうしたんですか、なのはさん」

早く彼に会いたいのに――――

邪魔しないでほしい。

「彼は大丈夫？」

……なんでなのはさんが彼を心配するんだろ。

彼のことを考えるのはあたしだけで充分なのに。

「大丈夫ですよ

「あたしが彼を看病してるんで」

彼のことはなのはさんには関係ないことだ。

なのに、なのはさんは言う。
「でも、やっぱり心配だよ」
「わたし、彼の様子見てくるね」
「待ってください！」
彼の部屋に向かおうとするなのはさんを私は止める。
「なのはさんに風邪が移ったら大変ですし、行かないほうがいいですよ
「彼のことはあたしに任せて、なのはさんは自室に戻ったらどうですか？」
「でも……」
……彼を見るのは私だけでいい
それでも、なのはさんは言う。
「ティアナは今から彼の看病に行くんでしょ？
「彼も看病してもらう人が一人より二人のほうがいいと思うんだ
「だから、わたしもティアナと一緒に――」
……いらない。
あたし以外の人が彼の傍に居る必要ない。
「いりませんよ
「彼だって、なのはさんが居てほしくないと思いますよ」

「……そうかな」

私が言うとなのはさんは寂しそうな表情をして俯く。

「でも！」

なのはさんは顔を上げると私を見る。

「ティアナだって訓練終わりで疲れてるでしょ？

「だから、わたしもティアナの手伝いしちゃ駄目かな？

「私も彼のために何かしたいの」

――――しなくていい

「いりませんよ！」

――――彼を見るのはあたしだけで充分なんだ

「彼の傍には私が居ますから、大丈夫です！！」

叩きつけるように私が叫ぶ。

なのはさんはまた俯く。

「それでは、失礼します」

あたしは黙っているなのはさんを置いて、彼の部屋にに向かった。

――――彼を見るのはあたしだけで充分なのに

何であの人は邪魔をするんだろう？

――――邪魔なだけなのに

――――あたしから彼を奪うなんて

――――――

「遅かったな」

あたしが部屋にはいると彼は言う。

返事をせずにあたしはソファーに座り、持っていた小さ目の鍋を置いた。

「……ティアナ？」

何も言わないあたしを心配してくれたのか、彼は私の名前を呼ぶ。

……彼があたしのことを心配してくれてる。

……それでいい、彼はあたしのことだけを見てればそれで――――

すると、ティアナはゆっくりと此方を向いて言った。

「さっきね、なのはさんに会ったの」
あたしが唐突に言うと彼は首を傾げる。
「そしたらね、あんたの様子を聞いてきたの
「なのはさんには関係ないことなのにね
「あたしが元気ですよって言ったらなんて言ったと思う？
「自分も看病に行くって言ったの
「……関係ないのに
「あたし1人で充分ですって言ってもなお付いてこようとするの
「でもね、あたしが少し強く言ったらすぐに諦めちゃった
「迷惑だよね
「簡単な気持ちで人の邪魔をしようだなんて――」
あたしは黙って彼を見る。
彼は困った表情をしている。
――――なんで、そんな顔するの？
「なのはさんだって俺を心配してくれたんだろ？
「そう邪推に扱わなくても――」
彼が言い終わる前にあたしは言う。
「あんたを心配するのはあたしだけでいい
「あんただって、なのはさんのことを心配する必要ないわよ
「あたしのことだけ心配してくれれば――」
ティアナがそういうと鍋の蓋を開ける。

「ほら、あたしが1人で作ったのよ
「あんたのことが心配だったから急いでね
「邪魔さえ入らなければ急がなくてもよかったんだけど――」

――――なんで、邪魔をしたんだろう

――――彼にしても、あたしにしても邪魔でしかないって事わからなかったのかな？

あたしはスプーンでお粥をすくい、彼に向ける。

……これぐらい、いいよね。

「ほら、口を開けなさい
「口を閉じてたら食べられないわよ」

彼は驚いた顔をしながらあたしを見る。

「……それとも、私のじゃなくて、なのはさんのが食べたかった？
「あたしが作ったのは食べたくなくて、なのはさんのが食べたいの？」

だとしたら許せない。

あたしから彼を奪った奴を――――

許しはしない。

「いや！　そんなんじゃなくて！！」

彼はあわてて言う。
「自分で食べられるから、そういうのはいらないんだけど……」
「病人は大人しく言うこと聞きなさい」
彼はスプーンをじっと見る。
「なぁ、ティアナ
「何でこのお粥は赤いんだ？」
彼は首を傾げながら言う。
……大丈夫
あたしの血は数滴しか入ってないんだ――――
流石にわかるはずがない。
「味付けを辛くしたのよ」
あたしが言うと彼は大人しく口をあける。
――――彼はあたしの言うことをちゃんと聞いてくれる。
「フフフ……」
そんな彼を見てると笑みが止まらない。
「美味しい？」

あたしあがいうと彼はすぐに返事をする。

「美味しいよ」

そうよね。

だって、それにはあんたの大好きなあたしの血が入ってるもん。

「あんたの大好きなものを少しだけ入れたんだもの、気に入って当然よね」

あんたが食べたいならいつでも食べさせてあげる。

――――食べてもらいたい

「あーん」

あたしが次の分を差し出すと彼は大人しく口をあける。

――――何度も何度も

彼が食べるたびにあたしの血が彼の口に入っていく。

そうかんがえただけで笑みが止まらない。

彼は美味しそうに食べてくれる。

まるで、あたしの血を美味しそうに食べてくれてるみたいに――――

――――フフフフ……

彼に食べさせていると、お粥も残りわずかになった。
あたしはそれを彼の口に運ぶ。
――――待って
あたしは彼を見る。
そして、ゆっくりとスプーンを自分の口に運んだ。
彼が口を開けたまま止まっているのを確認すると、彼のの両頬を両手で優しく包み込む。
――――そして
――――あたしはは彼に顔を近づける
――――あたしは彼とキスをする
驚いている彼にあたしは口移しでお粥を食べさせる。
――――もう少しだけキスしていたい
でも、彼が苦しそうなため残念な気持ちはあるが、大人しく離れる。
「美味しかった？」
顔を真っ赤にしている彼に言う。

「な、なんで！？」
なんで？
決まってるじゃん、そんなの――――
「……もしかして、嫌だった？」
「嫌じゃなかったけど――――」
「そうよね、嫌なはずが無い
「私がやったんだから、嫌なはずが無い」
あたしは持ってたスプーンを空っぽの鍋に置く。
「……いきなり口移しだなんて」
彼はいまだに顔を真っ赤にしながら言う。
「急にしたくなったの
「こんなことするのは相手があんただからよ
「あんたは特別だから――」
――――特別なの
「あんただけが私の特別なの
「誰でもない、あんただけが――
「あたしの――」
――――大好きな人だから

「ティアナ」

彼はあたしの名前を呼ぶ。

彼に名前を呼んでもらえるのは嬉しい。

彼に呼んでもらえるだけで幸せな気持ちになる。

「俺も、ティアナのこと特別だって思ってるよ

「今までも――

「そして、これからも、思い続ける！！

「だから――」

――――彼は一息つくと言う。

「――好きだ」

――――言ってくれた

――――好きだって

――――今まで、何も言ってくれなかった彼が

――――あたしの大好きな人が

――――言ってくれた！！

「知ってたわよ」

あたしは強気な態度で言う。

――――知っていた

でも、自信がなかった。

もし、違ったらどうしよう。

もし、他の人のことが好きだったらどうしよう。

「あたしはあんたのことで知らないことなんて無い

「だって、私はあんたのこと好きだもん

「違う、愛してる

「あんたのことを――愛してる」

何時も不安だった。

もし、違ったら――――

あたしは、その人と彼に何をしても可笑しくないから。

間違いなくその人から彼を奪うだろう。

あたしは立ち上がり、彼に馬乗りになる。

――――彼ならきっと美味しいって言ってくれる。

「ほら、見て

「お粥の材料を切ってるときに怪我しちゃったの」

あたしは彼に左手の人差し指を見せる。
その指には絆創膏がはってある。
あたしは絆創膏を外して、傷口を彼に見せる。
「少し深く切っちゃってね」
あたしは彼を見る。
――――愛しの彼を
――――見つめる
「あたしと約束して欲しいことがあるの」
この約束はあたしにメリットは無い。
「六課解散までにお互いに本気で好きな人が出来たら別れる」
彼以外の人を本気で好きになるはずが無いあたしからすれば、これはデメリットしかない。

「女のあたしからみても、六課には魅力的な女性が多いの
「あんたには、その中で私が一番だって言ってほしい
「あんたには、六課で私のことだけを必要としてほし
「――だから
「あんたが六課で本気で好きな人が出来たら、あたしは大人しく別れる

「あたしはあんた以外の人のことを好きになるはずが無から安心して」

――――彼にはあたしといて幸せと感じてほしい

だから、六課の女性みんなの中からあたしを選んでほしい

ここの人達はみんな魅力的だ。

だから、その中からあたしを選んでほしい。

――――あたしのことを

「もしこの約束が守れるなら、私の指を舐めて

「あんたに舐めてもらえたら、怪我の治りも早いと思うし」

……舐めてほしいとは思ったけど、これhやりすぎたかな。

あたしが少し後悔してると、彼はあたしの傷を舐める。

――――それを見て、あたしは確信する

「フフフ……

「舐めてくれるよね

「だって、あんたはあたしのこと大好きだもん

「あたしも大好きだよ

「誰よりも、何よりも

「何時だって、これからも

「――あんたのことを愛してる」

――――あたしは、彼に愛されてることを

――――確信する

あたしは、指をどかして彼に顔を近づける。

――――愛しの彼と2回目のキスをするために

――――

「あたしの血美味しかった？」

あたしが聞くと、彼は困った顔をする。

「……俺は、血の味とかわからないし」

……まぁ、そっか

「でも、ティアナのだって考えたら美味しい気がする」

彼は顔を少し赤くする。

――――本当に

「あたしも、あんたのだって思えば何でも美味しいって思えるわよ」

――――血も体も何もかも

「……そっか」

彼は顔を赤くしてあたしから顔を逸らす。

「フフフ……

「顔が赤いわよ」

「うるさい」

からかうようにあたしが言う。

――――本当に、今が幸せだって思える

何時までもこの幸せが続けばいいのに。

――――――

この物語の終わりをあんたは知ってるかしら？

……邪魔された

あたしの幸せが奪われた。

彼はあの日――――

別れ話を切り出したときにいった。

小声で、ギリギリ聞き取れるぐらいの声で。

『ごめん、ティアナ』

――――なのはさんは知ってるの？

あたしが諦める条件が『本気で好きな人が出来たら』ってことに。

脅してまで彼をあたしから奪うなら――――

あたしが、彼を奪い返す！！

――――どんな手を使っても。

――――取り戻す

病みつきティアナ～裏話～（後書き）

幸せだった。

私は彼と付き合うことが出来て幸せだった。

なのに――――

奪われた！！

彼を！！

私の大好きな彼を！！

私が愛してやまない彼を！！

私の恋人を！！

彼女が！！

あの人が奪った！！！

――――許さない

何をしてでも取り戻す！！！

どんな犠牲があろうと、取り返す！！！！

私は――――

彼を愛してるから！！！！！！！

ＰＳ次回の案内人は私の恋人よ。

私と彼が幸だった頃の話をするらしいわ。

病みつきティアナ～病みつきなのは（前書き）

さて、今回の話は語られなかった物語だ。

まぁ、正確に言えば語るほどでもない物語だけどね。

これは、俺とティアナが大きく関係している話であり――――あの人が関わる切っ掛けを作った話しでもある。

――――さぁ、最後のプロローグの始まりだ

病みつきティアナ～病みつきなのは

ティアナと付き合い初めて直ぐのこと。

「少しいいかな」

訓練が終わり、『とある場所』に向かおうとした俺をなのはさんが止めた。

「用事があるから、わたしの部屋に来ない？」

やはり、何時もの誘いらしい。

「すいません、先に約束した人がいて」

頭を下げながら言うと、なのはさんは慌てて言う。

「君は悪くないよ！

「悪いのは――」

なのはさんが一呼吸置くと口を開く。

「今日は諦めるよ

「それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

俺に背を向けて恐らく自分の部屋へと歩きだしたなのはさんを見届けた後、俺も歩きだした。

――――彼女がいるであろう場所に

――――――

「遅かったわね」

機動六課にある人気が無い廊下にて彼女――――ティアナに声を掛けられた。

「ごめん、少しなのはさんと話してたんだ」

俺が言うとティアナはやれやれといった感じで言う。

「なのはさんもどうしてこう毎日毎日人の彼を誘うんだろ……

「あんたのこと早く諦めればいいのに

「……諦めればいいのに」

最後の言葉は独り言のように呟きながら言うとティアナは俺に近づいてくる。

「あんただって迷惑なのにね

「好きでもない人に毎日部屋に誘われて

「あんたがなのはさんのことを好きだったら別に――

「別に、構わないけど」

ティアナは俯きながら続ける。

「ううん、やっぱり駄目だ

「なのはさんだけは

「なのはさんにだけは譲りたくない

「あんたもなのはさんのこと好きじゃないでしょ？」

首を傾げながら聞いてくるティアナに対し俺は応える。

「……好きではないね」

そりゃ、尊敬してるし、自分のことをよく見てくれてるいい教官だとは思ってる。

でも、それだけ。

好きではない。

そんなことを考えていたら、ティアナに腕を掴まれて、そのまま引っ張られる。

「ほら、行くわよ」

……やれやれ

軽くため息を吐きながら――――

嬉しそうに笑っているティアナの横顔を見ながら――――

俺は歩きだした。

――――

ティアナは自分の部屋の前に着くと俺の手を離して此方を見る。

――――綺麗な瞳で

――――俺を見る

「私はあんた以外の人を好きにならない」

ティアナは両手で俺の両頬を優しく包み込む。

「私はあんた以外の人を好きにならない
「好きになれ無い
「あんただけ――
「私が生涯愛す人はあんただけよ
「――あんたしかいない」

それだけ言うとティアナは俺に顔を近付ける。

俺もそれに合わせて顔を近付ける。

俺とティアナはキスをした。

――――恋人同士

――――互いに互いを愛してることを確認するために

――――キスをした

ティアナが俺から離れると言う。

「あんたは私以外の人を好きになるの？」

ティアナは少し不安そうに言う。

「ならないよ」

――――好きだから

「なるはずがない」

――――ずっと好きだったから

ティアナは満足そうな笑みを浮かべると部屋に入る。

「おやすみ」

「おやすみ、ティアナ」

俺が言い終わると同時に扉が閉まった。

俺は自室に向かって歩きだした

――――幸せを噛み締めながら

――――――

それから3日後、俺は彼女に話し掛けられた。

「――とても大事な話だから」

――――そう

俺は彼女――――なのはさんに話し掛けられた。

――――プロローグは終わった

――――幸せなプロローグが

病みつきティアナ～病みつきなのは（後書き）

……幸せだったよ

誰に何を言われようが、俺は幸せだった。

勘違いしないでくれよ、今が不幸ってわけじゃないんだ。

ただ、この時が幸せ過ぎただけだ。

ずっと好きだった彼女に愛されて――――

彼女を愛すことが出来て――――

さて、次回は久々の作者登場だ。

需要が無いのは百も承知だけど、せっかくだから病みつきティアナの感想を書きたいんだってさ。

次回は飛ばしてもいいからね。

ＰＳ次の次はいよいよあの人が本格参戦だ。

前書き後書きは俺だけどね。

病みつきティアナ（ティアナ裏話）感想（前書き）

今回は私の病みつきティアナの感想ですので、飛ばしても大丈夫です。

病みつきティアナ（ティアナ裏話）感想

こんにちはー勠bでーす

病みつきティアナとティアナ裏話、そしてティアナとなのはを繋ぐ話し皆さんはどれが一番気に入りましたか？

私はティアナ裏話ですね。

ヤンデレ系の話はそれなりに書いているつもりですが、ヤンデレ目線の話は初めてでしたので大変でした。

さて、これまで投稿した病みつきシリーズの中でもティアナは不評です。

うーん、なんでかな？

ティアナ裏話は殆どティアナと変わらないからしょうがないとして、ティアナが不評だったのは正直ショックでした。

なかなかに上手く（私の上手くなんてしれてるけど）出来たと思ったんですけどねー

それでも、感想には後日談が気になると書いてくれた方がいて嬉しかったです！！

ティアナはなのはの前日談と言ってますが、元々そんな予定はありませんでした。

ただ、ティアナの病みつきならなのはにも名前が出てたんだしいけるかなーなんて思いながら考えたのが病みつきティアナです。

病みつきなのはでは既にティアナと付き合っている設定だったので、それを使いました。

それでは、今回はこのあたりにしときましょう。

次回からはあの人が登場！！

ＰＳ途中から感想では無くなってる件について

病みつきなのは（前書き）

さて、この物語もやっと中盤だ。

これから先はバットエンドだ。

少なくとも、俺からしたらね。

……この話は無力な俺の話さ。

無力で優しくて、偽善者な俺の話。

――――バットエンドに繋がる話

病みつきなのは

「・・・・どうしたんですか、なのはさん」

その日少年は管理局の仕事が終わり部屋へと戻ろうとした所を高町なのはは止めた

「少し用事があるんだけど・・・・すぐ終わるから私の部屋まで来てくれないかな？」

・・・・・またか

高町なのはが仕事終わりの少年を呼び止めるのはコレが初めてではない

3ヶ月ほど前からこの質問はほぼ毎日続けられている

「すいません、今日はもう疲れてて・・・・また今度じゃ駄目ですか？」

少年は苦笑いをしながら彼女の質問に答える

初めの方は呼ばれたら着いていったがやることといえばただの雑談であり

先ほどまで訓練をしていた少年としては今すぐにでも部屋へと戻りそのまま寝たいのだ。

「ごめんね、明日じゃなくて今日話したいことがあるの・・・・・とても大事な話だから」

何時もならあぁいえば諦めてくれるのに・・・・

もしかしたら、本当に大事な話なのかもしれない

「わかりました、行きましょうなのはさん」

少年がそういうとなのはは嬉しそうに笑いながら少年の手を握る

「じゃあ、早く行こ」

「ちょっと待ってください！！」

「？・・・・忘れ物でもしたの？」「い・・・・いや、そうじゃなくて、何で手を握るをですか！！？」

「・・・・・手を握っちゃ駄目なの？」

「いや・・・駄目って訳じゃ無いですけど・・・でも、その・・・恥ずかしいですし・・・」

「私は恥ずかしくないよ？」

どうやら何を言っても無駄らしい

首を傾げながらいうなのはを見ながら少年は手を離してもらうのを諦める

そのまま場の流れにまかせて少年はなのはの部屋まで行く

「それで、大事な話って何ですか？」

なのはの部屋に着き少年は自分が呼ばれた理由を早速聞く

「せっかく部屋まで来たんだからそんなに急がないで、少しは休もうよ」

・・・・本当に大事な話があるのか？

なのはは扉の前で立っている少年をソファーに座らせる

「紅茶がいい？それともコーヒーがいい？」
「・・・・なのはさんと同じでいいです」
「なら、紅茶でいいね」

なのはは少年に飲み物の確認を取るとそのまま小型キッチンに行くなのはさんやフェイトさんクラスにもなると部屋にキッチンまでつくのか・・・

あれ？そういえばフェイトさんがいない・・・・
なのはさんとフェイトさんは同じ部屋のはずだしまだ仕事なのか・・・・

「紅茶入れてきたよ」

ソファーの前にある小さめね机の上にピンクと青のカップを置きその青いカップを少年の前に置く

・・・ちょうどいい、聞いてみるか

「そういえばなのはさん、フェイトさんはどうしたんですか？」
「何で？」
「いや、少し気になって・・・」「何で私の前でフェイトちゃんのことを聞くの？」
「私が毎日のように部屋に誘っても余り来てくれないのに・・・・何でやっと来てくれたと思ったらフェイトちゃんの話をしようとするのかな？」
「い・・・・いえ、なのはさんとフェイトさんは同じ部屋だから帰って来ないのかと思いまして・・・」
「そんなにフェイトちゃんに帰ってきて欲しいの？
私と2人で居るのはそんなに嫌なの？」

「そ、そんなこと無いですよ・・・・ただ、少しだけ気になっただけです、本当に少しだけ」
「・・・それだけ？」
「はい、それだけです」
「そう・・・フェイトちゃんは今日はヴィヴィオの部屋に入るよ、私が今日は君と大事な話があるからってお願いしたの」
・・・・つまり、今日は始めから俺を部屋に呼んで大事な話をしようとしてたのか
少年は一端落ち着くため青のカップに手を伸ばし、紅茶を飲む
・・・・少し苦いな、まぁ紅茶何て余り飲まないし、こんなものなのか？

「美味しい？」

少年がカップを置くと同時になのはが聞いてくる

「美味しいですよ、とても」
「えへへ、嬉しいな喜んでくれて、私も君に美味しいって言って貰えるように頑張ったんだよ」
紅茶を入れるのに頑張る？・・・まぁ、紅茶だって入れ方一つで味が変わるとか聞くし・・・・
なのはが照れ臭そうに自分の頬を掻く
少年はそんななのはを見てると1つの違和感に気付く
「あれ？なのはさん」
「どうしたの？」
「右手の人差し指どうしたんですか？」

先ほど少年の手を握った時は何も無かったのに今は右手の人差し指には包帯が巻かれている

「え！？・・・ちょっと訓練の時に怪我しちゃって・・・」

「でも、さっき手を握った時には何も無かったと思ったんですが・・・」

「きっと左手で握ったんだよ！！、だってこれは訓練の時に怪我したんだもん！！！」「はぁ、そうですか」

まぁ、どうでもいいか

少年はなのはの怪我についての質問を止め、ここに来た理由でもある大事な話についてきく

「それでなのはさん、そろそろ大事な話について教えてくれませんか？」

「・・・・そうだね、そろそろ話そうか」

「大事な話ってそもそもどういう話何ですか？」

「君の人間関係について少しね」

人間関係？何か問題でもあったか・・・・？

「最近、ティアナと仲が好いよね」

「え？、そうでしょうか前と変わらないと思いますけど」

「前からティアナとキスしてたの？」

ッ！？・・・何でなのはさんがそれを・・・・？

「3日前にね、見ちゃったんだ、ティアナの部屋の前で2人がキス

してたの」

少年が何も言わなくてもなのはは続ける

「始めはね、嘘だと思ったんだよ?、でも、次の日も見ちゃったんだ、流石に2日も続けて見ちゃったら信じるしかないでしょう?」

まるで少年の行動が全てわかってると言いたいように少年の言いたいこと全てわかってると言いたいように

「そして昨日の休憩時間中にティアナに聞いたら2人が付き合ってるって言われちゃってね・・・・

あれはティアナの勘違いなのかな?、それとも君が無理やりティアナの彼氏にされちゃったのかな?」

「いや、そんなこと無いですよ・・・・」

「何でティアナを庇うの?

そっか!!、正直に言っちゃったらティアナに何されるか分からないもんね。

でも大丈夫だよ、私が君を守から」

「いや、そうじゃなくて・・その、告白したのは俺から何です」

少年がそう言うとなのはは首を傾げる

「言ってる意味がわからないよ?だって君はティアナに脅されてるんでしょ?

そうじゃ無きゃこんな事あるはず無いよ」

「脅されて何ていません!!俺は、ティアナの事が好きだから告白したんです」

少年が顔を赤くしながらそう言うとなのははクスクスと笑いだす

「・・・？どうしたんですか」

「ねぇ、何で君はティアナが好きなの？」

「それは・・・・何時も気が利くし、何があっても前向きだし、優しいし・・・・・」

「そう・・・・本当に君が告白したんだ」

なのははクスクスと笑うのを止めると少年の目を真っ直ぐ見る

なのはの目には光が無い

「私は君が望めば何だってするよ、管理局を辞めろって言われれば辞めるし君が自分のために一生働けって言えば一生働いてみせる」

「・・・・何が言いたいんですか？」

「ティアナと別れて私と付き合って」

「ッ！？・・・・そんなの嫌ですよ！！！」

「何で？君から別れようって言いたくないならティアナに言わせるのもいいよ？」

「いや、そういう話じゃ無くて！！、そもそも別れたく無いんですよ俺は！！」

「そんなこと無いよ、私はわかってるもん君の本当の気持ちも、君以上に知ってる」

「何でそんなこと言えるんですか？」

「私は君のことずっと見てるんだよ？だからわかるの君はティアナとは別れて私と付き合いたいってことも」

・・・無茶苦茶だ

さっきから意味がわからない、もういいや帰ろう

明日また何かあればはやてさんやフェイトさんに相談すればいい

「言いたいことはわかりましたでは、俺はこれで」
「君は私が出した紅茶を美味しいって言ってくれたよね」
？何だ急に
少年はなのはから差し出された紅茶を飲み確かに美味しいと応えていた
「はい、言いましたけど・・・それが何か？」
「私、本当はねキッチンで指を怪我しちゃったの」
「紅茶を入れるのに指を怪我したんですか？」
「うん・・・でも、少し違うかな『しちゃった』んじゃなくて『するようにした』かな」
しちゃったは間違えてやったって感じだがするようにしたって聞くと故意を的な感じだが・・・
「何時もは包帯何てキッチンには置いてないんだけど今日は怪我することがわかってたから用意しといたの」
「わざと怪我したって言いたいんですか？何でまたそんなことを？」
「君に美味しい紅茶を飲んで貰う為だよ」
美味しい紅茶を飲んで貰う為に怪我をする？
・・・・もしかして
「紅茶の中に・・・・まさか・・」「うん、入れたんだよ、『私の血を』」

ッ！？意味がわからない！！何で自分の血を入れて・・・！！
少年はその話を聞くとそのまま飲んだ紅茶を全部吐き出そうとトイレへと急ぐ

部屋が広くなってはいるが基本的な構造は少年と同じということもありトイレは直ぐに見つかりそのままさっき飲んだものを吐き出そうとする

「嬉しかったんだよ、君に美味しいって言ってもらって、紅茶と一緒に私の血の味も褒めてもらってるって考えただけで幸せだったよ」
トイレにいる少年に聞こえるように扉に向かって幸せそうに笑いながら言うなのは、それを聞いてまた吐き気が少年を襲うがそれに耐える。

ふざけるな！！！
紅茶と一緒に自分の血を混ぜるだなんて・・・・！！
いや、この問題は後だ
今は1分1秒でも早くこの部屋から出たい

少年はさっきから何かいってるなのはを無視しながら自分の今連絡できる人たちを探す

ティアナやスバルは寝てるだろうし仮に起きてたとしても力にならないな
エリオとキャロは間違いなく寝てるだろう
・・・・なのはさんの事だしここはフェイトさんかはやてさんに助けてもらうか・・・・

少年の考えがまとまったと同時に目の前にモニターが出る

そのモニターには右手が映っており、人差し指には包帯が巻かれていた

「ちゃんと私の手見えるかな？」
扉ごしになのはさんの声が聞こえる
やはり、この手はなのはさんのなんだろう

「・・・・・何なんですか？」
「君がティアナと別れないんなら私このまま手首を切るよ？」
はぁ！！！？何言ってるんだよこの人！！！！？

「な、何でそんなこと！！？」
「だって君が私と一緒に居てくれないならもう私には生きてる意味が無いもん」　「そんなこと無いですよ！！それになのはさんが死んだら六課の皆だって悲しみますよ！！」

少年が説得するなか、なのはは人差し指の包帯を取っていく

「ねぇ、見てよこの傷」

包帯が完全に取れた人差し指にはかなり深い傷があった

「本当はもっと小さめの傷にする予定だったんだけど・・・・君とティアナのこと考えたらこんなに深くなっちゃった」
「ッ！！？・・・・な、何でそんなこと・・・・」
「ちゃんと言ったよ？君が好きだから」
「こんなこと好きな人にやる行動じゃない！！！」
「そうかも知れないね・・・でも、こうでもしないと君は私を見てくれないでしょ？」「そんなこと・・・」

「訓練が終わったあとティアナの誘いには乗ったけど私の誘いには断ってたじゃん」
「そ、それは・・・・」
「ほら、やっぱり君が私を見てくれるにはこうするしか無いじゃん」
そういうとなのはは左手に魔力刃を作る
「どうする？君の答え次第では私は・・・・」
ッ！！？・・・・本当に死ぬ気なのか！！？
・・・・俺はティアナの事が好きだ・・・でも、それでも・・・
「止めてください！！！ティアナとは別れますから！！」
「本当？」
「はい、本当です！！ですから自殺何て馬鹿なこと止めてください」
「わかったよ、君が言うなら」
なのはは魔力刃を消して少年の前に出していたモニターも消す
少年はトイレから出るとニコニコと嬉しそうな笑顔をしているなのはを見る
、今さっき自殺しようとしていた人間には全く見えない
「じゃあ、ティアナとはどうやって別れる？」
「・・・・俺が別れようって言います」
「そっか、わかったよ。
そろそろ遅いしもうそろそろ帰って寝たほうがいいよ？明日も早いんだし」
「・・・・そうですね、わかりました」
少年はその会話を最後になのはの部屋を出る

「待って！！」

部屋を出ると直ぐになのはさんに呼び止められた

「・・・・・どうしたんですか？」「これが最後だと思うけど・・・・・一応ね」

なのはさんは俺に顔を近付けてくる

・・・さっきの事もあり、恐怖心からか彼女の目をまともに見れない

「もし私以外の人と君が付き合ったら・・・・またこういう事になるかも」

「ッ！！？・・・覚えときます・・・」「うん、そうしといて」

それだけ言うとそのまま離れていき「おやすみ」とだけ言ってなのはさんは部屋へと戻っていった。

次の日、俺はティアナに別れ話を出した。

何を言われるかわからなかったが、意外にも何も言われることは無かった。

もしかしたらなのはさんが既に何か言ってたのかもしれない。

最近はなのはさんに誘われたらその誘いに乗ることにしている。

本当は断りたいがこの間の事もあり断るだけの勇気が無いのだ。
だが、この間のような事は無く、なのはさんと2人、フェイトさんがいれば3人で雑談している。

なのはさんとは付き合ってはいない。
お互いに告白もしてないし俺は告白なんかしたくない
だが、彼女から告白されたら俺はおとなしくそれを了承するのだろう。

俺には選択肢なんて無いんだから・・・・

今日も訓練が終わり彼女が近付いてくる。
彼女の言うことはわかってるし、それにたいする俺の返答もわかっている。

彼女がいるかぎり俺には選択肢なんて無いんだから・・・・

病みつきなのは（後書き）

さて、今回の話はどうだったかな。

本来ならこの物語の１話はこれなんだ。

まぁ、今までのはプロローグだよ。

……プロローグか。

まぁ、体験した俺からすればプロローグだなんて甘いものではないんだけどね。

……にしても、俺はよく血を飲むな。

別の物語に出ている隊長補佐君もよく血を飲むのかな？

また会ったら尋ねてみよう。

ＰＳ次回の案内人はあの人だよ。

あと、感想とかくれたら嬉しいな。

病みつきなのは～裏話～（前書き）

わたしは見てしまった。

彼の様子を見るためにした行動。

軽はずみな行動だった――――

今でもそう思っている。

でも……正解だった。

そのおかげでわたしは彼を助けることができた。

わたしはずっと彼の傍にいられるようになった。

――――これはそんな話し。

わたしと彼の幸せな物語のプロローグ。

病みつきなのは～裏話～

彼が風邪で倒れた。

わたしがそれを聞いたのは朝の訓練の時にティアナからだった。

……今日の朝は彼に会えないんだ

流石に風邪で倒れている彼に訓練をさせるわけにはいかない。

私は彼を抜いたＦＷ陣で朝の訓練を開始した。

――――なんでティアナは彼が風邪で倒れていることを知ってるんだろう

そんな疑問を胸に抱きながら。

――――――

朝の訓練が終わってＦＷ陣が解散する前にわたしはティアナを呼んだ。

「どうしたんですか、なのはさん」

顔には出てないが明らかに嫌そうにティアナは言う。

「彼が風邪で倒れたのを何でティアナが知ってたのか気になってね」

普通なら隊長であるわたしに言うのが先のはずなのに……

何でわたしじゃなくてティアナに連絡したんだろう。

「私が彼に用があって部屋に訪ねたんです

「その時の彼が見てわかるぐらい体調が悪そうだったんで調べたら熱がありました」

……そっか。

そうだよね、彼がティアナに直接教えるはずが無いよね。

だって、わたしは隊長だもん。

教えるなら先ずはわたしからだよ。

「……なのはさん」

ティアナは首を傾げながら言う。

「何でなのはさんが彼を気にするんですか？」

そんなの――――

「同じ部隊の仲間だからだよ」

あたりまえだ。
彼はわたし達と同じ部隊の仲間なんだから。
そんな彼を心配するのは当然だ。
「……そうですか」
ティアナは冷たく言う。
「今から私は彼の看病に行くんで失礼します
「なのはさんは来なくても大丈夫ですよ
「彼を看病するのは私だけで充分ですから」
ティアナはそれだけ言うと歩きだした。
「でも――」
ティアナはわたしが言い終わる前に被せて言う。
「必要ありません
「彼にはあたし以外――」
……心配だよ
でも、ティアナが看病するなら大丈夫――――――かな？
仕事が終わったらティアナと一緒に看病に行こう！！

わたしはそんなことを考えながら歩きだした。

――――――

仕事が終わり、ティアナと共に彼の看病をするため彼の部屋に向かっていた。

そんな時、偶然にもティアナを見つけたため声を掛けた。

「ティアナ」

ティアナがわたしの方を向く。

ティアナは小さめの鍋を持っていた。

彼に何か作ったのかな？

――――料理だったらわたしの方が上手いのに

彼にわたしの手料理食べてほしかったなー

ちょっと残念だ。

「どうしたんですか、なのはさん」

ティアナは何時もより早口で言う。

「彼は大丈夫？」

ティアナだって疲れてるんだから、早く休んでほしいし――――

やっぱり、彼の看病はわたしがしたほうがいいよね。

……彼だってそのほうが喜んでくれるだろうし。

「大丈夫ですよ

「あたしが彼を看病してるんで」

――――それでも

「でも、やっぱり心配だよ

「わたし彼の様子見てくるね」

「待ってください！！」

部屋に向かおうとしたわたしをティアナが止めた。

「なのはさんに風邪が移ったら大変ですし、行かないほうがいいですよ

「彼のことはあたしに任せてなのはさんは自室に戻ったらどうですか？」

「でも……」

今日1日彼に会ってないし――――

それに、彼の看病もしてあげたい。

「ティアナは今から彼の看病に行くんでしょ？
「彼も看病してもらう人が1人より2人の方がいいと思うんだ
「だから、わたしもティアナと一緒に――」

「いりませんよ
「彼だって、なのはさんが居てほしくないと思いますよ」

わたしはそれを聞いて目線を床に移す。
そんなこと……

でも、もしそうだったら……

「……そうかな」

――――それでも

「でも！！」

目線をティアナに移してわたしは言う。

「ティアナだって訓練終わりで疲れてるでしょ？
「だから、わたしもティアナの手伝いしちゃ駄目かな？
「わたしもかれのために何かしたいの！！」

風邪で寝込んでいる彼のためになりたい。

訓練終わりで疲れてるティアナのためになりたい。

でも、そんなわたしにティアナは叩きつけるように叫ぶ。

「いりませんよ！！
「彼の傍にはあたしが居ますから、大丈夫です！！」
っ！！
わたしはそれを聞いて俯く。
「それでは、失礼します」
黙っているわたしを置いていくようにティアナは歩きだす。
……こんなことしちゃ駄目だと思うけど
わたしはティアナにある魔法を使う。
ティアナがそれに気付かずに歩いているのを確認したら、わたしも自室に向かった。

――――――
「――好きだ」
彼の声が聞こえる。
ティアナに使った魔法はいわゆる盗聴魔法だ。

ティアナが聞こえた音を聞こえるようにしたんだけど――――

わからない。

意味がわからない。

何で彼がティアナに告白してるの？

何で彼が？

そんなのまるで彼がティアナのことを――――

――ない

――り――な――

ありえない

ありえない！！

何で！何で彼が！！？

ティアナに――――

ティアナに告白してるの！！？

何で――――

「お粥の材料切ってるときに怪我しちゃったの

「少し深く切っちゃってね」

1人困惑しているわたしを置いてティアナは進める。

「六課解散までにお互いに本気で好きな人ができたら別れる」

――――えっ？

別れる？

彼とティアナが？

……別れる

わたしは彼がティアナの傷口を舐める音を聞きながら、ゆっくりと目を閉じた。

――――今後、どうすればいいかを考えるために

――――何でわたしはこんなにも嫌悪感を感じてるのかを考えるために

何でわたしは――――

――――

「少しいいかな」

彼とティアナが付き合いだしてから直ぐのこと、わたしは彼を自室に誘った。

――――自分の気持ちを理解したいから

わたしは彼のことを好きなのかもしれない。

……わからない。

わたしは異性を好きになったことが無いから、この気持ちが何なのかがわからない。

――――だから、この気持ちを理解するために

「すいません、先に約束した人がいて」

頭を下げながら彼は言う。

下げる必要なんかないのに。

「君は悪くないよ！！

「悪いのは――」

――――悪いのは彼じゃない

「今日は諦めるよ

「それじゃ、おやすみなさい」

――――悪いのは全部ティアナだもん

わたしは彼に背を向けて歩きだす。

彼も今から約束してた人に会いに行くんだろう。

少ししたあと、わたしは彼の後を付けることにした。

――――

彼が約束してた人はやっぱりティアナだった。

彼とティアナは2人仲良く笑みを浮かべながら何か話している。

……彼が嬉しそうに笑っているのを見ると胸が締め付けられるように痛くなる。

それと同時にティアナが憎くなってくる。

……ティアナがいなければ今ごろ2人で話していたのかもしれない。

そう考えるだけでティアナが憎くなる。

――――そして

ティアナの部屋の前に付くと、２人は――――

――――キスをした

わたし以外の人とキスをしている彼を見る。

――――嫌だ

こんなの嫌だ！！

自分でもりよくわからない、でも嫌だ。

わたしは――――

――――

その日、どうやって部屋に帰ってきたかもわからないわたしは、彼のことを思い出す。

初めて会ったときから、今日のティアナとキスしてるところまで、全て昨日の事のように思い出せる。

――――それぐらい

――――それぐらいわたしは彼のことが好き

……好きなんだ。

ユーノ君やクロノ君とは違う、全然違う。
比べものにならないぐらい彼のことが好き。
――――だから
ティアナから、彼を取り戻す。
きっと彼が言った告白もティアナに無理矢理言わされたんだ。
そうに違いない。
――――それ以外ありえない
ありえない。

――――――

あれから2日後。
彼とティアナは毎日訓練後に会ってはキスをしていた。
「ねぇ、ティアナ」
その日の昼に私はティアナを呼び出した。

「どうしたんですか、なのはさん」
ティアナは一瞬嫌そうな顔をする。
「今日ね、ティアナに見せたいものがあるんだ」
今日のための準備は万端だ。
「見せたいもの……ですか？」
ティアナは首を傾げながら言う。
「うん、訓練が終わったらまた呼ぶね」
私はそれだけ言うとティアナと別れて自分の部屋に向かった。

――――――
……先ずは
部屋に着いてすぐ私は救急箱を台所に移した。
――――彼はティアナの血を飲んだ。
彼はティアナの血を飲んで汚れてしまったんだ。

――――だから

私の血を彼に飲ませて綺麗にしないと。

本当なら彼の汚れた箇所を切り抜きたいけど――――

そんなことをしたら彼は死んじゃうから駄目だ。

……ティアナのせいで汚れてしまった彼を少しでも綺麗にしてあげよう。

――――私は

――――私だけが

彼を本当に愛してるんだ。

だから、彼を綺麗にいてあげる。

愛しの彼を。

――――

訓練が終わるより少し前にティアナを空き部屋に呼び出した。

「見せたいものって何なんですか？」
私はティアナをバインドで拘束する。
「ッ！　なのはさん！？」
驚いているティアナの前にモニターを出す。
「これは……」
「私の部屋だよ
「ティアナに見せたいものはもう少しだけ時間が掛かるの
「だから、もう少しだけここで待っててね」
私は何か叫んでいるティアナを置いて部屋から出ていった。

――――――

「……どうしたんですか、なのはさん」
ティアナと別れてすぐに彼に話しかけた。
「少し用事があるんだけど……すぐ終わるから私の部屋まで来てくれないかな？」
今日は何があっても彼を連れていかないと――――

「すいません、今日はもう疲れてて……また今度じゃ駄目ですか？」

……そんなにもティアナに早く会いたいの？

私よりもティアナの傍にいたいの！？

「ごめんね、明日じゃなくて今日話したいことがあるの……とても大事な話だから」

私が念を押すと彼はあきらめたように言う。

「わかりました、行きましょうなのはさん」

……彼はやっぱり私の言うことを聞いてくれる。

私も君の言うことなら何でも聞くよ。

「じゃあ、早く行こ」

私は彼の手を取る。

「ちょっと待ってください！！」

「？……忘れ物でもしたの？」

「い……いや、そうじゃなくて、何で手を握るをですか！！？」

「……手を握っちゃ駄目なの？」

「いや…駄目って訳じゃ無いですけど……でも、その……恥ずかしいですし」

「私は恥ずかしくないよ？」

彼は顔を赤くしながら言う。

可愛いな。

どんな彼でも好きだけど、恥ずかしそうに顔を赤くする彼はまた一段と好きになりそう。

そんな彼の横顔を見つめながら私たちは私の自室へと向かった。

――――――

「それで、大事な話って何ですか？」

部屋について彼は私に言う。

「せっかく部屋まで来たんだからそんなに急がないで、少しは休もうよ」

……そうしないと彼を綺麗にできない。

私は部屋の前に立っている彼をソファーに座らせた。

「紅茶がいい？それともコーヒーがいい？」

私は彼に聞く。

「……なのはさんと同じでいいです」

「なら、紅茶でいいね」

私は彼を置いて台所にむかった。

――――――

私は台所に行くと紅茶の用意をする。

２人分のカップを置くと、１つの上に右手の人差し指を置く。

左手に包丁を持つと、右手の人差し指を軽く切る。

……ティアナの血で汚れた彼を綺麗にするために。

「っ！！」

私はふと彼とティアナがキスをしたことを思い出した。

「あ……」

私の予想よりも深く切ってしまった。

彼のカップに私の血が溜まっていく。
……これだけあれば綺麗になるかな？
私はそんなことを思いながら傷跡に包帯を巻いた。
――――もう少しだよ
――――もう少しで
君を綺麗にできるよ。
――――綺麗にしてあげれるよ。

――――
「紅茶入れてきたよ」
彼の前に私の血が入った紅茶をおいた。
「そういえばなのはさん、フェイトさんはどうしたんですか？」
ッ！！
何で――――

「何で？」

「いや、少し気になって……」

意味がわからない。

「何で私の前でフェイトちゃんのことを聞くの？」

「私が毎日のように部屋に誘っても余り来てくれないのに・・・・何でやっと来てくれたと思ったらフェイトちゃんの話をしようとするのかな？」

そんなに私と二人でいるのはいやなの？

なんで？

私はこんなにも君の傍にいるために、君を邪魔な人達から守るためにがんばってるのに！！

「い……いえ、なのはさんとフェイトさんは同じ部屋だから帰って来ないのかと思いまして――」

「そんなにフェイトちゃんに帰ってきて欲しいの？

「私と2人で居るのはそんなに嫌なの？」

「そ、そんなこと無いですよ・・・・ただ、少しだけ気になっただけです、本当に少しだけ」

「……それだけ？」

「はい、それだけです」

「そう……フェイトちゃんは今日はヴィヴィオの部屋に入るよ、私が今日は君と大事な話があるからってお願いしたの」

はじめから君を部屋に呼ぶつもりだったんだもん。

フェイトちゃんには前もってお願いしといた。

彼は一息つくと紅茶を口にする。

飲んでくれた。

彼が私の血が入った紅茶を飲んだ。

飲んでくれた！！

「美味しい？」

彼がカップをテーブルに置いたのを確認するという。

「美味しいですよ、とても」

っ！！

彼が私の血が入った紅茶を美味しいって言ってくれた！！

「えへへ、嬉しいな喜んでくれて、私も君に美味しいって言って貰えるように頑張ったんだよ」

これで少しは綺麗になったかな。

えへへへ

君の役に立ったって考えただけで嬉しいな。
幸せな気分になるよ。
……やっぱり、君を幸せにできるのは私だけ。
私だけなんだ！！
「あれ？なのはさん」
「どうしたの？」
「右手の人差し指どうしたんですか？」
えっ！？
「え！？……ちょっと訓練の時に怪我しちゃって――」
「でも、さっき手を握った時には何も無かったと思ったんですが……」
「きっと左手で握ったんだよ！！、だってこれは訓練の時に怪我したんだもん！！！」
「はぁ、そうですか」
やっぱり君はわたしのことを見てくれてる。
私も君のことちゃんと見てるよ。
「それでなのはさん、そろそろ大事な話について教えてくれませんか？」
「……そうだね、そろそろ話そうか」
「大事な話ってそもそもどういう話何ですか？」
「君の人間関係について少しね」

ここからが本題だよ。

君に関すること。

これを見てるティアナに関すること。

「最近、ティアナと仲が好いよね」

「え？、そうでしょうか前と変わらないと思いますけど」

「前からティアナとキスしてたの？」

違うよね。

君がティアナとキスするぐらい仲がよくなったのは、きみが風邪で倒れてからだよね。

……あれから君が汚れちゃったんだよね。

「3日前にね、見ちゃったんだ、ティアナの部屋の前で2人がキスしてたの」

君のことをストーキングしたときにみた。

君の事を見てるとき見てしまった。

「始めはね、嘘だと思ったんだよ？、でも、次の日も見ちゃったんだ、流石に2日も続けて見ちゃったら信じるしかないでしょう？」

……嘘じゃない。

君がティアナのモノになった。

「そして昨日の休憩時間中にティアナに聞いたら2人が付き合ってるって言われちゃってね……
「あれはティアナの勘違いなのかな？
「それとも君が無理やりティアナの彼氏にされちゃったのかな？」
多少強引でも君を取り戻さないと。
私の君を――――
「いや、そんなこと無いですよ……」
「何でティアナを庇うの？
そっか！！、正直に言っちゃったらティアナに何されるか分からないもんね。
でも大丈夫だよ、私が君を守から」
私は何時でも、何処でも君の味方だよ。
君だけの味方なんだもん。
だから、ティアナのことを庇わなくてもいいんだよ。
「いや、そうじゃなくて……その、告白したのは俺から何です」
……違う。
「言ってる意味がわからないよ？だって君はティアナに脅されてるんでしょ？
そうじゃ無きゃこんな事あるはず無いよ」
君はティアナにそう言うように脅されてたんだよね。

「脅されて何ていません！！俺は、ティアナの事が好きだから告白したんです」

彼は顔を赤くしながら言う。

私はそんな可愛い彼をクスクスと笑いながら見つめる。

「……？どうしたんですか」

「ねぇ、何で君はティアナが好きなの？」

「それは……何時も気が利くし、何があっても前向きだし、優しいし――」

「そう……本当に君が告白したんだ」

やっぱり汚れちゃってる。

彼がティアナのせいで汚れちゃったよ。

大丈夫だよ――――

私が綺麗にしてあげるからね。

「私は君が望めば何だってするよ、管理局を辞めろって言われれば辞めるし君が自分のために一生働けって言えば一生働いてみせる」

「……何が言いたいんですか？」

「ティアナと別れて私と付き合って」

「ッ！？……そんなの嫌ですよ！！」

「何で？君から別れようって言いたくないならティアナに言わせるのもいいよ？」

「いや、そういう話じゃ無くて！、そもそも別れたく無いんですよ俺は！！」

ふーん
そんなにもティアナに毒されちゃったんだ。

「そんなこと無いよ、私はわかってるもん君の本当の気持ちも、君以上に知ってる」
「何でそんなこと言えるんですか？」
「私は君のことずっと見てるんだよ
「だからわかるの君はティアナとは別れて私と付き合いたいってことも」

そのほうが君のためだ。
私は他のみんなと違って自分の利益なんてかんがえない。
君の事しか考えない。

そんな私といたほうが君も幸せだよ。

「言いたいことはわかりましたでは、俺はこれで」
「君は私が出した紅茶を美味しいって言ってくれたよね」

立ち上がろうとした彼を私は止める。

「はい、言いましたけど・・・それが何か？」
「私、本当はねキッチンで指を怪我しちゃったの」
「紅茶を入れるのに指を怪我したんですか？」
「うん……でも、少し違うかな『しちゃった』んじゃなくて『するようにした』かな」

彼は首を傾げる。

彼はどんな顔をするのかな？

「何時もは包帯何てキッチンには置いてないんだけど今日は怪我することがわかってたから用意しといたの」

「わざと怪我したって言いたいんですか？何でまたそんなことを？」

どんな顔でもいいよ。

私はどんな君でも愛してるもん。

「君に美味しい紅茶を飲んで貰う為だよ」

「紅茶の中に……まさか――」

彼はまさか言いたげな顔をする。

「うん、入れたんだよ、『私の血を』」

それを聞くと彼は口を押さえて走りだす。

方向からしてトイレかな？

「ねぇ、ティアナ見てる？」

私は上を見て言う。

「……彼は返してもらうよ」

私は歩き出した。

彼のことを考えながら。

彼を奪い返す一歩手前までいったことに喜びを感じながら。

――――

「嬉しかったんだよ、君に美味しいって言ってもらって、紅茶と一緒に私の血の味も褒めてもらってるって考えただけで幸せだったよ」

私はトイレの扉の前で中にいるであろう彼に言う。

悲しいな。

ティアナのときはこんなことしなかったのに。

……なんでかな

なんで君はティアナの時とは反応が違うの？

何でかな何でかな何でかな何でかな何でかな何でかな何でかな何でかなかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかな

私は彼の前にモニターを出す。

「ちゃんと私の手見えるかな？」

彼が私の思いに応えてくれないなら――――

「……何なんですか？」

「君がティアナと別れないんなら私このまま手首を切るよ？」

――――こんな世界で生きる意味なんかない。

「な、何でそんなこと！！？」

「だって君が私と一緒に居てくれないならもう私には生きてる意味が無いもん」

「そんなこと無いですよ！！それになのはさんが死んだら六課の皆だって悲しみますよ！！」

知らないよ。

君が傍にいてくれない世界なんか興味ない。

誰に悲しまれようと関係ない。

「ねぇ、見てよこの傷」

私は彼に見えるように包帯を取る。

「本当はもっと小さめの傷にする予定だったんだけど……君とティアナのこと考えたらこんなに深くなっちゃった」

「ッ！？……な、何でそんなこと――」

「ちゃんと言ったよ？君が好きだから」

「こんなこと好きな人にやる行動じゃない！！！」

「そうかも知れないね・・・でも、こうでもしないと君は私を見てくれないでしょ？」

「そんなこと……」

「訓練が終わったあとティアナの誘いには乗ったけど私の誘いには断ってたじゃん」
「そ、それは――」
「ほら、やっぱり君が私を見てくれるにはこうするしか無いじゃん」
私は今が幸せだよ。
君が私を――
私のことだけを見てくれている今が――
私は左手で魔力刃をつくる・
「どうする？君の答え次第では私は……」
死んでもいい。
君が死ねというのなら
死んでもいい。
「止めてください！！！ティアナとは別れますから！！」
彼は叩きつけるように叫ぶ。
「本当？」
「はい、本当です！！ですから自殺何て馬鹿なこと止めてください」
「わかったよ、君が言うなら」
君が死なないでと言うなら死なない。
私は君の言うことなら何でも聞くから。
私は魔力刃を消して少年の前に出していたモニターも消す。

彼はトイレから出てくる。

あぁ、やっと彼を取り戻せた。

これからは私が君の事を守るからね。
もう誰も君を汚させない。
君を手放さない。

――――永遠に

「じゃあ、ティアナとはどうやって別れる？」
「……俺が別れようって言います」
「そっか、わかったよ
「そろそろ遅いしもうそろそろ帰って寝たほうがいいよ？明日も早いんだし」
「……そうですね、わかりました」

俯いている彼は部屋からでるために歩き出した。

「待って！！」

部屋をでて直ぐに私は彼を呼び止める。

「……どうしたんですか？」
「これが最後だと思うけど……一応ね」

私は彼に顔を近づける。

彼は私と目を合わせてくれない。

でも、いいよ。

今はまだ――――

時間はまだまだあるもんね。

「もし私以外の人と君が付き合ったら……またこういう事になるかも」

「ッ！！？……覚えときます」

「うん、そうしといて」

驚いた顔をする彼から離れる。

「おやすみ」

そのまま私は部屋に戻った。

――――――

この話のその後の話をしようかな。

彼はティアナと別れてくれた。

――――彼は、私の言うことを聞いてくれる

嬉しいな。

幸せだな。

君の傍にいるのは私
私の傍にいるのは君

――――いつまでも

――――永遠に

――――幸せだよ

病みつきなのは～裏話～（後書き）

幸せだよ。

君といられて幸せだよ。

君も幸せでしょ？

幸せだよね。

幸せって言ってよ。

――――ねぇ

ＰＳ次回はオリジナルの話になるよ。

病みつきなのは～閑話談～（前書き）

今回は、最後のチャンスを捨てた話だ。

何のチャンスかって？

それは本編でのお楽しみさ。

前書きで書くことではない。

それじゃ、そろそろ始めよう。

――――俺が愚か者に成り下がる、間話の始まりだ

病みつきなのは～閑話談～

今日という日は俺が忘れることは無い日になるんだろう。

機動六課解散当日

終わりは決まっていたとはいえ淋しいものだ。

――――今日から俺は彼女に会えなくなるかもしれない

――――今日から俺は彼女に会わない人生を送りたい

今日という1日は本当に忘れられない日になりそうだ。

――――

「おはよう、今日はいい天気だよ」

自室を出てすぐになのはさんに声を掛けられた。

あの日以来毎日のように彼女は朝早くから俺の部屋の前にいる。

「おはようございます。　今日がいい天気でよかったですね」

「そうだね。

皆とお別れする日なのに天気が悪いのはいやだもん」
なのはさんが近づいてくると俺の手を取る。
「最後に2人で六課を見て回ろうか」
……断れないよな
「わかりました。　行きましょう」
俺は二つ返事で了承すると歩きだした。

――――――

六課のメンバーが全員集まることはもうほとんど無くなるんだろう。
こうして廊下を歩き、すれ違う皆の顔を見るのも最後なのかもしれない。
そう思うと、なかなかに悲しいものだ。
「大丈夫、君にはわたしが傍にいるよ」
なのはさんは俺の心を呼んだかのようなタイミングで口を開く。

「六課の皆とは会えなくなるかもしれないけど、わたしなら何時でも君に会えるよ。
わたしは何時でも君の傍にいるし、離れてても君のことを見てるからね。
君はそれだけで充分でしょ？
わたしだけで充分だよね。
充分に決まってるよね。
君の傍にはわたし以外いらないし、わたしの傍にも君以外いらない。
だから、六課の皆と会えなくなっても悲しまなくてもいいんだよ。
君の傍にいるべきわたしは何時でも傍にいるんだから。
わたし以外の人間が離れていっても気にしなくてもいいんだよ。
悲しむ必要なんて無いよ。
そう思うよね？
そうとしか思わないよね」

なのはさんは足を止めると俺を真っ直ぐ見る。

「君に必要なのはわたしだけ。
わたしもそう
わたしに必要なのは君だけ
それ以外は関係ない。
わたしと君
必要なのはそれだけだよ。
それ以外は邪魔なだけだよね。
特にティアナ
ティアナはわたしと君の関係を今だによく思ってないみたいだし
……
ティアナには全く関係ない話なのにね」

「……そうですね」

ティアナの名前が出てきて俺は彼女のことを思い出す――――思い出してしまう。

「そんなことより、早く行きましょう」

「待って」

俺が気まずい空気を少しでも変えようと試してみるが、なのはさんはそれを止めると顔を近付けてくる。

「六課が解散しても、わたしは君を何時でも見てるよ。
どんなに離ればなれになっても君のことを見続ける。
どんな些細なことでも君のことを理解してるよ。
――――だから」

なのはさんは人目を気にせず俺にキスをする。

動かない、抵抗しようとしない俺に一方的にキスをした。

数秒後、彼女は俺から離れる。

「だから、君もわたしのことを知ってね。
どんな些細なことでもいい。
わたしのことを少しでも理解してほしいの。
わたしのことを少しでも見ていてほしいの。
――――君には
――――君だけには

わたしのことを誰よりも傍で見ていてほしい。
何時でも、どんな時でも傍にいてほしい。
――――わたしの傍に」

愛しい者を見るような目でなのはさんは俺を見て、静かに言った。

――――俺が彼女から離れたらどうなってしまうんだろうか

心配だ

誰が？
彼女が？
自分が？
周りの人が？

――――どれもだ

なのはさんは何をしでかすか分からない。

だから、傍にいる

――――居たくないけど、傍にいる

せめて、六課が解散するまでは。

今日までは。

今日という日を終えれば、会わないように気おつければいいだけ

の話だ。

――――だから

それまでは、あなたの傍にいますよ。

なのはさん

――――――

機動六課解散

それは、俺が自身の考えが甘いことをしらなかった時であり

それは、バッドエンドへの片道切符を破棄するチャンスを失った

――――忘れられない1日だった

病みつきなのは～閑話談～（後書き）

バッドエンドの片道切符

それが意味することはいずれわかるさ。

……今回は、彼女の独壇場だったね。

俺は馬鹿みたいなことを考えることしかしなかった。

彼女から逃げるならともかく、彼女の傍にいるだなんて決断は俺が愚か者だということがよくわかる決断だったじゃないか。

本当に憐れだよ、俺は

ＰＳ次は誰が得するか分からない作者の感想だよ。

もしかしたら飛ばすかもしれないけど

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6385x/

病みつきなのはシリーズ

2011年11月24日23時00分発行